シリーズ「国土教育」　『国土が日本人の謎を解く』で学ぶ、日本人のアイデンティティ

「日本人論」の教科書

ヨーロッパの「公」に対する、日本の「共」

失われた20年と言われる長期デフレで、日本は経済的ダメージ以上に日本人としての誇りと自信を失った。少子高齢化が日本の先細りを予見させる中で大切なのは「日本人をとりもどす」こと。『国土が日本人の謎を解く』（大石久和著、産経出版社）は、世界と日本の違いを理解することから日本人を再考しようと説く。日本人の特質を育んだ国土を知ることを出発点にした大胆な仮説と丁寧な検証。新たな日本人論は、ミステリアスな世界に読者を誘う。

本書は、ヨーロッパから見れば極東に位置する島国「日本」の国土が、長い時間をかけて世界に誇るべき日本人のアイデンティティを育んだ、その謎を解き明かす大きな物語である。

序章で、国土の自然条件とそこでの経験が民族の個性を規定すると定義。「積み重なる歴史」「変わらないことを大切にする文化」「紛争死史観」を持つ「人為の国」ヨーロッパ（人）に対し、「流れる歴史」「変わることを尊ぶ文化」「災害死史観」を持つ「天為の国」が日本（人）とし、日本人であることを見つめ直し「日本人をとりもどす」ことから再出発しようと語り始める。

第一章は、「地震」「津波」「火山活動」「風水害」そして「飢餓」を加えたわが国の自然災害史を掘り下げる。大規模な自然災害が、日本人のものの考え方や感覚に大きな影響を与え、日本の歴史を動かしてきたと解説。「御成敗式目はなぜ1232年に制定されたのか？」「法然、親鸞、一遍、栄西、道元、日蓮など、鎌倉新仏教の巨星たちがなぜこの時代に生まれたのか？」「八代将軍徳川吉宗の子孫のみが、なぜ御三卿という将軍家を継承できる特別の権利を認められたのか？」「幕末・明治維新の背景には何があったのか？」。取り扱われる歴史テーマは興味深い。

第二章は、日本の国土の自然条件の特異性（日本の国土は他国とどう違うか）を解き明かす。

日本人を育んだ国土とは、①複雑で長い海岸線と細長い弓状列島②四島に分かれた国土の主要部分③脊梁山脈の縦断④不安定な地質⑤狭くて少ない平野⑥軟弱地盤上の都市⑦大地震の可能性⑧集中豪雨⑨強風の常襲地帯⑩広大な積雪寒冷地域……という10ほどもの厳しい自然条件とその重複であった。

先人たちは頻発する災害に絶望したり、くじけることなく、繰り返し災害からの復興を果たし、大変な努力で、より安全でより効率的な国土をつくりあげた。日本人の勤勉性はこうした努力によってもたらされた、と誇る。

フランスとイギリスの間のドーバー海峡の幅は約30キロメートルしかなく、紀元前のローマ時代でさえ大軍が渡ることができた。朝鮮半島と日本列島を隔てる対馬海峡は幅約200キロメートルもある。大昔からこれを越える人の往来があり文化の交流はあったが、大軍が越えることはできなかった。この大陸との微妙な距離感が、わが国の歴史や日本人の成り立ちを規定したと解説。

サミュエル・ハンチントンの主著『文明の衝突』において、イギリスが西欧文明に含まれるのに対し、日本文明は中華文明に含まれない独立した文明で、北方・西方・南方の各種文明が集合し、新たな文明を育てた「るつぼ」であるとも解く。これが章末の「日本の文明は中国文明の一派などではない」との強いメッセージにつながる。

第三章から第五章で、ヨーロッパの「公」に対する、日本の「共」、中国の「権力」という構造を解き明かす。

「日本はいつからか『日本になった』のではなく初めから日本だった。過去に『建国理念』を宣言したり、独立宣言や人権宣言を持ってきた国柄ではない。移民した人々が建国したアメリカはもちろん、ドイツもフランスも、戦争や革命などを経て、『現在の国になった』のだが、世界の中でほとんど唯一、日本は『現在につながる国が昔からあった』のである」

「おわりに」の中で日本人論の核心がこう語られる。

興味深いシナリオ展開と数々の新たな発見、中等教育国語科教材で取り上げられるレベルの、平易な文体が、一気に読者を誘い込む。氏の前著『国土と日本人―災害大国の生き方』（中公新書）が「国土学」の教科書であるのに対し、本書は「日本人論」の教科書とも言える。

著者はヨーロッパでの最近のある調査結果に危惧を抱いた。「あなたは国際人だと思うか」の問いに対し、「そう思う」と答えた日本人が欧米人よりずっと多かったのだ。日本人はどこへいってしまったのだろうか。私たちは日本人の誇りを失ってはならない。本書は「日本人を原点とすることこそが、唯一の世界へ雄飛する道である」と結ぶ。

道の駅 点描

国道愛好家　松波成行

「ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく 啄木」。かつて駅にいく一つの愉しみでもあったのが、ブルートレインや夜行列車を見にいくことでした。大きな荷物を抱えて列車に乗り込む人の表情は帰省や観光で故郷に向かう希望や愉しみにあふれ、向かう先の地方の「訛」に巡り合うと、たとえ旅をしていなくとも「旅情」を感じるものでした。今や夜行列車は風前の灯火となり、そのような場面に立ち会うことも少なくなっています。

車による旅では画一的なコンビニを避け、できるかぎり地元のスーパーに足を運ぶようにしています。地域の特徴的な食材がどのように陳列され、賞味されているのか。調味の種類や味は多様であり多彩で、特に牛乳や醤油といった地域色が強い銘柄はどのようなものがあるかなど興味は尽きません。そのような味覚への指向だけでなく、もう一つ、店に集う地元の人々の会話や行き交う言葉の訛を聞くと、その地域に来たという実感や「旅情」を一層強く感じることができます。

道の駅は旅行者をターゲットとすると同時に、地域の連携の場であることも重視して発展してきました。地元の人々が憩う道の駅、地元の人々に活用される道の駅。地方創生の中で道の駅が地元とより強く結び付き、地域外との結接点となることで、道の駅からさらに旅情が感じ取れるようになるでしょう。